

特集「インタラクションの理解および基盤・応用技術」の編集にあたって

小川 剛史^{1,a)}

本特集号は、2019年3月6日（水）～8日（金）に、学術総合センター（一橋大学一橋講堂）で開催されたシンポジウム「インタラクション2019」（大会委員長：斉藤典明、プログラム委員長：小川剛史）に連動して企画しました。

同シンポジウムは、1997年より毎年開催されており、ユーザインタフェース、CSCW、可視化、入出力デバイス、仮想/拡張現実、ユビキタスコンピューティング、ソフトウェア工学といった計算機科学、さらには認知科学、社会科学、文化人類学、メディア論、芸術といった人文科学の研究者および実務者が一堂に会し、インタラクションに関わる最新の技術や情報を交換・議論する場を提供してきました。主催は、本学会ヒューマンコンピュータインタラクション研究会、グループウェアとネットワークサービス研究会、ユビキタスコンピューティングシステム研究会、エンタテインメントコンピューティング研究会、デジタルコンテンツクリエーション研究会の5研究会となっています。

今回で23回目となる「インタラクション2019」は、招待講演、登壇発表、インタラクティブ発表（デモ/ポスター）で構成しました。プログラム委員会による厳選な審査を経て登壇発表20件（インタラクション特集号からの招待2件を含む）と、インタラクティブ発表（デモ）164件、インタラクティブ発表（ポスター）50件が採択され、3日間を通して活発な議論が行われました。

インタラクションに関する研究は進歩が早く、発展が著しいため、迅速な論文化の機会を提供することが重要です。そこでインタラクション2019の開催に合わせてインタラクションに関する特集を組み、インタラクション2019における発表論文および関連研究を広く集め、速やかに公表することを目的に特集号を企画しました。本特集号は、第1回目のインタラクションシンポジウムであるインタラクション'97に連動して企画された、Vol.39, No.5 (1998年)に端を発し、今回が20回目となります。

本特集号の編集委員には、インタラクション2019のチーフプログラム委員19名を中心に迎えました。チーフプログラム委員は、インタラクション2015から導入された仕

組みで、同シンポジウムの登壇発表のメタ査読を担当しています。本特集号では、このチーフプログラム委員と編集委員の役割を上手くリンクさせ、インタラクション2019で採択されていた論文については、可能な限り同じメタ査読者（編集委員）が対応するという体制を取りました。採否判定の方針は、論文誌ジャーナルの判定基準で、読者にとって価値のある論文を採択することとしました。その結果、本特集号への投稿数19件に対して、8件の論文（採択率42%）が採択されました。また、当初不採録と判定されたものの、編集委員会の議論の結果、条件付き採録と判定し、最終的に採録判定になる論文も存在するなど、編集委員会の果たした役割は大きかったと考えています。

本特集号が、インタラクションという研究分野に関係する読者の皆様にとって価値のあるものとなることを願っております。また、本特集号を通して、ぜひインタラクションシンポジウムにも興味を持っていただき、登壇発表・インタラクティブ発表への投稿や、聴講者として参加していただけることを期待しております。

最後に、ご投稿いただいた著者の皆様、編集にご尽力いただいた幹事・編集委員の皆様、丁寧な査読にご協力いただいた査読者の皆様、本特集号の機会を与えていただき編集を支援いただいた論文誌編集委員会と学会の事務局の皆様に深く感謝いたします。

「インタラクションの理解および基盤・応用技術」特集号編集委員会

- 編集委員長
小川剛史（東京大学）
- 幹事
志築文太郎（筑波大学）
- 編集委員
伊藤貴之（お茶の水女子大学）、伊藤雄一（大阪大学）、木村朝子（立命館大学）、倉本 到（福知山公立大学）、河野恭之（関西学院大学）、後藤真孝（産業技術総合研究所）、坂本大介（北海道大学）、角 康之（公立はこだて未来大学）、高嶋和毅（東北大学）、竹川佳成（公立

¹ 東京大学
The University of Tokyo
a) ogawa@nc.u-tokyo.ac.jp

はこだて未来大学), 塚田浩二 (公立はこだて未来大学), 寺田 努 (神戸大学), 中西英之 (大阪大学), 福本雅朗 (Microsoft Research), 真鍋宏幸 (芝浦工業大学), 水野慎士 (愛知工業大学), 山下直美 (NTT), 吉野 孝 (和歌山大学)